

日本文学研究資料叢書

小林秀雄

有 精 堂

日本文学研究資料叢書

# 小林秀雄

日本文学研究資料刊行会編

有精堂

日本文学研究資料叢書

小林 秀 雄

---

---

昭和 52 年 6 月 25 日 發 行

編 者 日本文学研究資料刊行会

發行者 有精堂出版株式会社

代表者 山 崎 誠

---

101 東京都千代田区神田神保町1-39

發行所 有精堂出版株式会社

電話 03 (291) 1521~3 番  
振替口座 東京 9-40684

---

---

文弘社

3395-550652-8610

## 『日本文学研究資料叢書』刊行に際して

日本文学の研究は、戦後三十数年を経て、再検討と新しい方法への模索が試みられ、転換期にあると言われております。そうした状況のなかで、未来に開かれた日本文学研究を形成して行くためには、当然のことですが、従来の研究業績を正しく評価し、その基礎の上に新しい成果を積み重ねることを志向しなければなりません。

本叢書はそうした要請に答えて、日本文学研究の未来に賭けられた可能性のために刊行されたものです。今や、国文学界も、マス・コミュニケーションの時代は避けられず、多数、多種の情報が、錯綜し、混乱して伝達され、その氾濫は真の学問的交流を阻害するようになっていくようにさえ見えます。尨大な著作・雑誌・紀要等々が刊行され、それらのうちには、入手しようとしても、往々図書館にさえ具備されていないといったように、種々の困難が、そうした錯綜の上に重なり、学問の発展を阻害する壁として立ち塞がっているのが現状です。こうした時代の中で、真に学問的なコミュニケーションを確保するために、本叢書は有効的な役割を果たす決意で刊行されたものです。

本叢書は、既発表の研究論文のなかから、従来の研究に大きな意味を持っているもの、あるいは新しい可能性を開拓しているものなどを選択し、各時代・ジャンル・作家・作品ごとに論集として編集し、各研究分野の、基礎的・基本的な情報を、出来る限り有効的に提供することを目標としたものです。また現代の日本文学研究の動向が、本叢書によって総覧でき、今後の進路を導く羅針盤でありたいと希望しております。

日本文学の研究者、特に若い未来にのみ存在する研究者に、本叢書の趣旨が期待され、支援され、永続的な事業として継続される力を与えて下さるように願ってやみません。

目次

小林秀雄 — その思惟形成過程の問題 —	磯貝英夫	一
小林秀雄の方法と思想性	脇坂充	二
小林秀雄における批評の方法	宇波彰	三
小林秀雄における言葉の問題	細谷博	四
*		
小林秀雄 — 封じ込めの青春 —	佐藤悦子	五
小林秀雄の問題	横田俊一	六
小林秀雄とランポオ体験 — 批評家への道程 —	佐藤昭夫	七
小林秀雄に於ける精神性と物性	安西金造	一〇
小林秀雄とボードレール	桜井龍丸	二二
*		
小林秀雄の「志賀直哉」	吉田熙生	二九
白鳥に対する小林秀雄	星加輝光	三三

横光利一と小林秀雄 — 作家と批評家の共生 — ..... 粟坪良樹…一四六

小林秀雄論 ..... 清水正徳…一六四

小林秀雄私論 — 知識人のマルキシズムとの遭遇 — ..... 大森義夫…一七四

ひとつの過失 — 小林秀雄はどうすればよかったか — ..... 小川徹…一八四

\*

小林秀雄・その一側面 — 二つの「罪と罰」論をめぐって — ..... 佐藤泰正…一九五

ドストエフスキーの手紙あれこれ ..... 中村健之介…二〇四

小林秀雄とハムレット — その批評意識形成の一側面 — ..... 高橋美和子…二〇九

\*

小林秀雄と古典 — 「自然」と「純粹」 — ..... 中村完…二一八

「戦争下の抵抗文学」ノート — 小林秀雄の姿勢に即して — ..... 杉野要吉…二二七

『無常といふ事』における改作意識 ..... 鎧坂昭江…二三三

小林秀雄『無常といふ事』私解 — その方法への序説 — ..... 越智良二…二六二

\*

小林秀雄のモツアルト ..... 田代秀穂…二七三

文学に於ける政治 — 小林秀雄の所論に就て — ..... 三好十郎…二八三

\*

解 說	……………	吉 田 熙 生	三六
小林秀雄研究参考文献	……………	吉 田 熙 生	三五

# 小林秀雄

— その思惟形成過程の問題 —

小林秀雄という存在が大きな文学史上の事件であることは、今日すでに異論のないところである。かれに対する私の関心もやはり、大きな悲劇をさんだ昭和の歴史の上にかかっている。しかし、一貫して、歴史の流れに垂直にまじわる人間の絶対的位相をのみ思考の対象にしてきたかれの歩みを、その拒否する平均的歴史の上ののせようとすれば、「今日では誰も彼も歴史だ歴史だと喚いてゐる。世の中を料理するには、こいつを時間の方向に添うて切るのが一番正しいといふのである。だが俺としてはこの世は結晶体の様に、いつも結晶面に添うて割れるものではあるまいと思つてゐる。」(Xへの手紙)とあらかじめかれ自身から平手打ちをくらっているようなものであるが、かれが浅薄な歴史主義を拒否すればするほど、そこに時代の一つの象徴的風貌があらわれるとすれば、この逆説的景観はなかなかの観物なのである。

## 磯貝英夫

小林秀雄の軌跡を外部とのてらし合わせの上に精密にたどりなおす仕事が必要であるけれども、ここではこまかくふれない。ただ結論的かというと、昭和十四年をかれの大きな変換期として前後に二分し、前期ではまた八―九年を一つの旋回期としてながめ、後期では十八年をもう一度の旋回期として考えるのが妥当だと思われる。(本多秋五氏は三期に分けて、その第二期を更に前期、中期、後期と分けているが、これはとらない。)しかし、こういう風に区分してみても、世にいわれる「小林の豹変」というようなものは見られず、今日、全集という一望通覧の便宜の上からいえば、むしろあの複雑な時代に処した一貫性をこそ見なおさなければならぬのであるが、それが、時代という抵抗体に即して弾道というにちかい弓なりの軌跡を画いているのが明らかに看取せられるのである。これは小林の意識からいえば、思想の深化過程ということになるかも知れぬが、そこにならぬ典型的な時代の子をわれわれは見出だすことができるように思う。

ここではもちろんすべてに触れるゆとりはない。私見によれば、十四年の転期から小林の仕事の積極的意味が出てくるので、特にその頃の動きの位置づけを試みたいのであるが、そのためには一通り登場以来の小林の風貌をながめておく必要がある。

昭和四年「様々なる意匠」をもって登場以来、六、七年にかけての文芸時評時代は、その絢爛さのわりに見るべきものがないが、ただその発言が何を対象に、何をめざして、どういう地盤からなされたか、それからなぜそれが大きな影響力を持ちえたかを知ることが大切である。かれの批評はもっぱら、「文壇を中心とする極限された日本インテリ社会の内部で、それだけを対象に、そのものつ宿命的な欠陥を自虐的に衝くという方法」をもって行われた。周知のように昭和初期は文学史上最も混乱した、様々な観念のひしめき合った時代であるが、それらは小林に恰好の好餌を提供したわけで、小林はその様々な意匠と実体との間の致命的な間隙に爆薬をしかけることで、まさしく文学界の虚をついたのである。「眼球突出症と両便失禁症との結構な組み合わせ」などと揶揄されてみればなるほどその通りの当時の論争で事実あったのだから、小林の批評は否定的発想だけで充分威力を持ちえたわけである。だが、そういうかれ自身の足下とは言えば、たとえ、その目がポオドレルやフロアベルによって開かれていたにしても、外ならぬ浮きあがった文壇そのものであったのだから、その破壊的情熱は結局自己自身に擬したのも同様であったのである。逆にいえば、小林は自分のせおわされてきた弱点、かれ自身最もよく吸いこんできた近代日本の毒をそのまま化して己れの武器としたのであって、そのゆえに強い説得力を持ちえたが、問題はその問いの果てに出てくる形が何であるかにあるはずである。自己否定の刃がどこで自己肯定にきりかえられるか、そ

の場所こそがこの精神の運動の最大の観物なのであるが、この頃はまだ、思想にとらわれまいという覚悟をくりかえし語るだけで、あるいは「批評とは他人をだしにして自己を語ることだ。」などと決意を述べるだけで、たしかかな形はあらわれてこない。ただ、かれが「原始人」志賀直哉をはっきり横目でにらんでいること、またほとんど志賀の親類の親を呈するランボォがポオドレルという「球体」を粉砕してあらわれること、そしてこの二つを連ねる基礎があきらかにかれの回転を支えていることを理解すれば、ほぼ小林の正体は予見することができようというものである。

周知のように、小林はこの頃文壇政治的に反マルクシズムの旗手としての位置に立ち、以後現在にいたるまで変らぬのであるが、注目すべきは、それが必ずしも思想対思想の対決という風のものではなかったという点である。かれがこの思想に立ちむかったのは、他の意匠に対すると同様で、しかもそれが主要の運動として見えたのは、プロレタリア文学の圧倒的勢威のゆえであった。かれが衝いたのは、この思想のわが国における受け入れられたの奇怪さに対してであって、思想そのものに対してではなかった。有名な「搦手から」という戦法がこれであるが、単に戦法ではなく、かれの精神の動きは当時ほとんどこの点にだけかかっていたのである。「マルクスの悟達」それに続いての「文芸批評の科学性に関する論争」などを読めば、むしろマルクス・エンゲルスに対する小林流の讚辭に満ちている。後年こそ「マルクスを大思想家だとは思はない。」(昭和十四年)とか、「もし科学だけあって、科学思想などといふ滑稽なものが一切消え失せたら、どんなにさばさばして愉快であらうか。」(二十五年)などというようになるけれども、この頃は、マルクシズムという思想の形骸を簡単にのみこんで、それを機械的に現実

あてはめようとする者の安易さに、マルクスその人の、物そのものから直接思想を抽出するきびしい労苦と情熱を対置してみせるといふ論法をとるのである。つまり、我国の知識人の観念的虚妄に問題があるので、それは他の諸々の近代主義に対する指弾とひとしなみで、反プロレタリアといつてもそれ以上でも以下でもなかつたのである。それはまた、やさしくパラフレイズすれば、「おまえがどんな理想家面をしようが、かげでどんな夫婦喧嘩をしているか、ちゃんと知っているぞ。」あるいは「科学とか理想とか云つたて、人間がそんなに簡単に分つたり、変つたりしてたまるものか。」といふ下世話の論理にそのまま通用する批評でもあつた。つまり、知識人の観念の急転に対する頑固な常識家の反撃という面影に小林の特殊があるのだ、しかもそういう単純な真理を語るのに、後年かれが「以前フランス象徴派詩人等の強い影響を受けたために、言葉の曖昧さに媚びてゐた時期もあつた。」(中野重治君へ、十一年)と述懐するような複雑な粉飾に満ちたポーズをとつたがゆえに、やがてはそれがかれの否定した意匠の一つとなり、エビゴネンの追隨となり、「愚なるエビゴネンの如き糞でも食らへだ。」(同前)と云つてみたところで、いつかはにがにがしさは本人自身にかえってくるはずのものであつた。

やがて、当然のこと、かれが外から内へ向う時がやってくる。昭和八、九年に始まる旋回期と前に云つたのがそれで、かれはもはやこの頃は外からの傍観者でなく、みずから文学潮流の先頭を切つて泳いでいるのだが、そうして泳ぎながら、空虚な表情を浮かべはじめるのである。

「東京に生れた私くらゐの歳頃の大多数の人々は、私くらゐの歳頃で東京に生れたといふ事がどのくらゐ奇つ怪なことかよく

知つてゐる。……言つてみれば東京に生れながら東京に生れたといふ事がどうしても合点出来ない。又言つてみれば自分には故郷といふものがない、といふ様な不安な感情である。」

(故郷を失つた文学、八年)

「他人の作品に出来るだけ純粋な文学の像を見ようとして、賞讃したり軽蔑したりしつゞけて来た事が、何か空しいことであつた様な気がしてならぬ。文学でもなんでもないものを強ひられて、文学でもなんでもないものゝ為に辛勞して来た様な気がしてならぬ。」

(文芸時評、八年)

文学的リアリティの崩壊、世相の奇怪さ、人間の混乱、自己嫌悪、——こういうものがすべて一筋の糸になつてたぐりよせられる時、もはや不安の文学の提唱というやうなことで納まつていられず、苦しい「脱出」への模索がはじまるのであるが、はたして八年十二月「文学界の混乱」の終りに突然「僕は今ドストエフスキの全作を読みかへさうと思つてゐる。」と方向転換を暗示するにいたる。一口で云えば、現代への不信から古典へ、団栗舞台を放棄して天才の世界へという方向である。

もちろんこういう転機は自然発生的なものどだけは云えず、文壇情勢の上の原因が探られなければならないが、特に注目すべきは、九年のナルプの解散である。小林はプロレタリア・イデオロギイを軽蔑していたけれども、よきにつけ、あしきにつけ、同行者であると共に主要敵国であつたものが別の理由で刀折れ矢尽きて崩壊するのを目前にして何らかの影響を受けなかつたはずはない。その直後、「日本の文学が論理的な構造をもつた思想といふものを真面目に取扱ひ出したのはマルクス主義文学の輸入から始まる」とある程度正當に評価し、「人間のうちに思想が生き死にする光景は、僕等にと

つて充分に新しい驚くべき光景だつたのだ。」と述べ、**「つらい事はたつた今始つたばかりだと僕は思つてゐる。」**と書いた**「紋章」と「風雨強かるべし」**を讀むの文章は小林らしい悼歌であつた。

敵を失つた小林の評論はもはや否定的發想の安易さによりかかるわけにはゆかないし、もつと根本的に己れの發言の理由そのものの喪失さえやがて味わなければならなかつたのではないかと思われ。いわゆる芸術派文学なるものは、人生に対する積極的な主張は何はともあれプロレタリア文学が荷つていくれる気安さに、心理とか不安とかモダニズムとかを唄いながら、その荷い手の隙だらけの横腹をたたいていたのであるが、急にそれが崩壊してみると、ただでさえせまい彼等の自由の地盤をいつかファシズムの大波がのみこもうとしているのを見ないではいられなかつた。**「紋章」**も**「風雨強かるべし」**も、真面目な作家の再建への模索であつたし、長篇小説要望の呼声につれておこつた系譜小説や行動主義文学などの登場も全体的人間の復活を祈念したものにはかならなかつたであろうが、その時はもはや頽勢を挽回する力はなかつた。

小林も否定から肯定へのしきりなおしを試みる。十一年「中野重治君へ」で珍らしく率直な調子で自分を反省し、「創造的批評といふ言葉を屢々使用したが、この言葉のほんたうの意味がどうやら分つて来た、つまりそれを実践しようとする覚悟が決つて来たのは極く最近の事なのである。」と告白する。戸坂潤に、幾何学的精神はあるが、工学的精神に欠けていると批評されてすなおに肯定しているのもこの年である。同じく十一年「Xへの手紙」という独白体の、青春の決算報告書ともいふべき作品を書いているのも注目すべきである。転機はようやくあきらかである。つづく十二、十三とほとんど沈黙を守つて、十四年、「ドストエフスキの生活」という本格

的創作批評を發表する。小林の第二の出発がここに始まることは前に述べた通りである。

### 三

「ドストエフスキの生活」においては、小林の自意識は一応表面から姿を消す。もはやここでは、批評とは自己証明だとは云われない。心理描写もない。因果必然の論理もない。ドストエフスキという奇怪な天才の錯乱した現実が、綿密な実証と、大胆な構成と、純粋な叙述によつて、時間の霞をはらつて浮かびあがる。小林は序文で「無論在つたがままの彼の姿を再現しようとは思はぬ。」という。だが「死兇の顔を描く」母親の愛惜だけが歴史の意味をあかさす、という小林は、これ以外にドストエフスキの姿はないという自信があつたのであろう。鷗外の史伝物とも努力の方向を等しくする仕事であるが、ここでかれは、変な云いかただが**「もの」**の思想をさぐり当てたと考えていいであらう。もっとも、それがたしかな自覚の形をとるのはもつと後であるが、ほぼその原形がこの労作で形成されたように思うのである。人間というあやふやな生物、特に、通念とか習慣とか性格とか心理とか、見ているうちに崩れてゆく人間の日常姿態を洗い清めて、その底に、たとえば画家が見、科学者が手にとるような、もはや動かすことのできない**「もの」**のものとしての実体を發見するという欲求方向がこれである。今までの否定と懷疑の仕事の果てに、ようやく不動の実体の上に足をそろえて立つことができたという実感が、ここでかれの自信を今までになく強めたように思われる。以後今日にいたる小林の思想のすべてはこの**「もの」**の思想の系として、最も自然に出てくるものばかりである。

だが、ここで「もの」という場合、かつての自然主義者も、物感としての確かさを求めて人間を「生物」にまで還元したことを注意しなくてはならぬ。また唯物論者も同じ追求から、人間以前の環境、社会という土壌にまで根を下ろしたことを考える必要がある。小林の「もの」はもちろんこの兩者とはちがっている。

小林は、生物でもない、社会でもない、独立した人間の個の精神に究極的な実在を求めようとしたのである。これはすでに出発からの情熱であるが、かれは論理による抽象を信じない結果、個から全へうつり、全から個にうつる間隙を飛ぶことを拒否することによってイデオロギイに対峙する。この闘いは苦しくかつ危いものだと見えて、この後も執拗にその虚妄を論証しようとしてやまない。だが自然主義の人間観は敵とするに足りぬのか、あまり駁論しない。ただ一度、プロレタリア文学崩壊後、昭和十一年、反転して、トルストイの家出をめぐる論争を正宗白鳥にいどんだことは有名である。

山の神のヒステリイをトルストイの家出の唯一の原因として、そこに平凡な自然主義的人間を見ようとした白鳥に対して、もし思想が実生活に訣別しなかったならば、思想に一体何の力があるか、と食いさがった小林はあきらかに生物的人間に対して、精神(思想)の独立を宣言したのである。わが国の自然主義Ⅱ私小説の文学史の上で、この論争が重要な位置を占めていることはすでに諸家の説く通りである。

「ドストエフスキイの生活」において実証されようとしているものも、「かれもやはり人間さ」という常凡人間性ではなく、また因果必然の法則によって社会にしぼりつけられた精神でもなく、支離滅裂な生活を采領する、奇怪な「精神」の自立性である。だが環境学にも、心理学にも、生物学にも還元することを許さない精神の

独立を見ようとするれば、凡庸人の凡庸な精神では間にあわないので、以後必然的に天才主義が結果する。そしてそれはそのまま現代への侮蔑ともつながる。また精神は精神を究極的に対象化することは不可能だという論理から、科学的な認識法は否定され、ながめる主体の側の直観の深化、目の鍛錬が唯一の、そして最後の方法として登場する。そうなれば、直観的といわれる日本の古典発見への道は一足であるし、直観芸術である造型美術への接近もすらすらと進む。また「知る」という作用の否定は不可知論の親株である美神と死神にむすびついて、そこにもはや言語などの到底証しえない絶対境を想望し、禅的ではあるが、「信」の世界さえひらけようとしている今日の小林の全部は論理的矛盾なしにすらすらと出てくるのである。

#### 四

しかし、ここで小林の思想の進展の跡をくわしくたどるゆとりはないし、その主張をどやかく一般論として議論する必要も感じない。かれの思想はきわめて常識的なもので、(悪い意味ではない。)西洋においてもニイチュを大宗とする最も典型的な思想の一つの型なのである。不可知論的直覚主義は、近代合理主義的世界観に対峙する一つの有力な流れであるし、その神話的歴史観、あるいは文学史を数珠玉をつらねた形として考える史観など何れもすぐ西洋に範疇を求めうる。だがニュアンスはもちろんちがう。小林には特に最近、伝統的(禪的、または武士道的)精神が色濃く、第一わが国に真に対決しなければならぬ合理主義思想があったかどうかを考えてみるだけでも、それがちがわなければむしろ嘘であるが、われわれが興味を感ずるのは、それら西洋の思想がどういう事情の下に小

林にとりついて、そしてどういふ風に小林自身の情熱として変形したかということなのである。

まず何より小林の精神主義的、審美主義的映像が日本の不幸な戦争期と歩調を合わせて形成されてゆくありさまを見なくてはならぬ。かれが「Xへの手紙」において、老衰した社会機構の改革への熱情を正当だとみとめながら、そういう時代の思想の政治的欺瞞を指摘し、政治は個人を救わぬと断じ、その結果、「社会のあるがまゝの錯乱と矛盾とをそのまゝ受納する事に耐へる個性を強い個性といふ。」と主張し、「俺はどんな党派の動員にも応じない。俺は人を断じて殺したくないし人から断じて殺されたくない。これが唯一の俺の思想である。」と述べたとき、二、二六事件が起り、日独伊防共協定が成立した。翌年は日華事変がはじまる。日本の宿命的コースはほぼこのころ決定的になるのである。小林がその中に住み、それを嘲笑していたインテリゲンチヤの根無し社会もだんだん押しまкруられ、かれの主要の敵マルクシズムも圧殺されるにいたると、これは現在から目をそむけ、しばらくドストエフスキイのかけにかくれる。やがて、十四年ドストエフスキイのかけから出てきた小林はにわかに従来とは趣の変った積極的な時事的発言を旺盛にするようになる。この年第二次世界大戦が始まり、非常時の呼声が盛にかわされる。そして小林は、「社会のあるがまゝの錯乱と矛盾とをそのまゝ受納しよう。」という主張を現実の事態に適用しはじめたのである。小林が、インテリ社会や、過去の社会でなく、直接現代の民衆の立っている社会について語ろうとしたのは前にも後にもこの戦争期だけであるから、これはなかなか興味ある課題を提供してくれる。小林はこの非常時になおイデオロギイとか概念とかをふりまわすインテリの頭をたたきつけると同時に、黙々として戦争に従事す

る国民の覚悟を大きくとりあげるのである。政治家を信用するようになったのではないが、時世の動きはもはや絶対的な宿命として容認される。その容認のしかたは具体的にはどんなものであったか。

「恐らくヒトラーは、平沼首相と同じく複雑怪奇だと言つて居るのだ。事態を冷静に、綿密に、正確にと心懸けて観察してゐる人間ほど、今日の事態の化けもの染み込みに驚嘆してゐるであらう。それは大いにありさうなことだ、といふより寧ろさういふパラドックスこそ現代文明の最大特色かも知れぬ。わが国の総理大臣が、遠くから眺めてさへ複雑怪奇と嘆息するのだ。ヒトラーほどの鋭敏なリアリストが、自分の料理してゐるものが、正銘の化け物だらゐる事は痛感しない筈はない様に思ふ。」

(神風といふ言葉について、十四年)

こういう化物じみた世相に対しては、「ヴァイオリンにしつくりしたヴァイオリンの箱の様なイデオロギイが、もう何の役にも立たぬ事は、当のスターリンやヒトラーが、一番思ひ知つてゐる筈」であり、こういう事変に対処するには、「様々な惑はしい意見やら解釈やらを拭ひ去つて」「僕等の長い歴史が鍛錬した」「そして性欲の様に疑へない」「エゴティズム即ち愛国心といふもの」を信するよりほかない。「神風」といふ言葉はそういう深いエゴティズムから出てきているのであって、「神風といふ言葉を発明する生活人の素朴な知慧と神風とは迷信であるなどいふ馬鹿みたいな理性と、そのどちらの觀念形態が、日本の現実社会にしつかりした根柢を持つてゐるかを観察するがよい。」という結論が出てくる。(同上)

「今日は、事実が思想を追ひ越して、先へ先へと進む。事実の方は僕等の予想を尻目にかけて、日に新たになり、その辻褄を合せようとして、僕等は日に旧くなる。言はゞそんな矛盾のなかに僕等は

ゐる」(疑惑、十四年)だから既成の概念にすぎりつく愚はやめねばならぬ。太閤が朝鮮の役に失敗したのは、かれのとり組んだ事態がまったく新らしいものであって、かれの豊富な経験知識がかえって新らしさに処する道を邪魔したからである。反対に信長が桶狭間の戦で勝ったのは、「難局の構造とその骨組を一つにした」直覚力のゆえで、その間に難局解釈の理論などを介在させていなかったからである。(事変の新しさ、十五年)

「今日わが国を見舞つてゐる危機の為に、実際に国民の為に戦つてゐる人々の思想は、西住戦車長の抱いてゐる様な単純率直な、インテリゲンチヤがその古さに堪へぬ様な、一口に言へば大和魂といふ、インテリゲンチヤがその曖昧さに堪へぬ様な思想に他ならないのではないか。……国民は黙つて事変に処した。黙つて処したといふ事が、事変の特色である。……この(国民の)智慧を現代の諸風景のうちに嗅ぎ分ける仕事、批評家としての僕には快い。」

(疑惑、十四年)

たとえそれがどんなに快かったにせよ、ここで小林が危い淵に立っていることを私たちは感ずる。世の中を合理的に、分析的に解釈することを虚偽と断じてしりぞけた精神が、その唯一の直観という武器でもって、所詮世の中は化け物だと観じたことは、まことに自然で正直だが、その結論はまことにあやうい感じをまぬがれない。それに、知識階級を論じたときの小林が、あれほど正確に核心を突いたのに対して、「国民」を語るときの小林がいかに浮きあがっていることか。結果の見わたせる今日だから云うのではない。小林の立脚地と、その思考法がそういう方向をたどらざるを得なかったことを云いたいのである。

小林はアランの「大戦の思ひ出」を読んで、ベルグソンを談ずる

将校を軽蔑し、獣のように眠る兵士を礼讃するアランの強い行動精神に共鳴しているが(感想、十五年)、そして事実小林の「もの」の思想にはアランの影響が圧倒的につよくひびいてることをわれわれは知りうるが、しかしわれわれが実際アランの「マルス」(裁かれた戦争)などを読んで受ける感動と、小林の戦争論を読んでうける感じとはおどろくべきほどちがうのである。アランの言葉の中には、云わばシトワイヤンの精神とも云うべきものが頭とすわっていて、何らの不安もないのである。ベルグソンを談ずる将校、それに

つながる政治家や将軍の言説の空虚をえぐる手つきには確固たる自信がある。「行為というもの、の外にあっては、私は常に絶望の傍にいた。」というそれだけの言葉の重量感も感動的であるが、それを引用し、「麦と兵隊」を賞めたりして同じことを云う小林の言葉は妙にうきあがって弱い。これは元来アランが理論家というより豊饒な眼と精神の所有者であるのに対し、小林が、その意志的叛逆にもかかわらず、元来空想的な一本気の理論家であるという事情にも由来しようが、それ以上のバックの差があるように思われる。ニュース映画を上演する者と、それを見て空想する者との差がそこにはあるのである。アランの背後にはフランスの歴史がある。みずから自由を獲得した伝統の重量感とその支えをなしている。アランは黙つて銃をとるけれども羅針板を失つたりはしない。事件を巨大な化物だなどとはもちろん言わない。いや、逆に黙々たる兵士の姿をうつし出しているうちに、敵の正体が自然に暴露してしまふようなしかけになっている。かれはイデオロギイなどで見はしないが、その目は正確に敵を見つめるのである。

ところがわが国では——たしかに国民は黙々と闘ったが、その沈黙の中にある言いがたい思ひは、かれの批難する隔絶したインテリ

社会の一員でしかやはりなかった小林に直観で見えてくるはずもなかった。ただ事変は絶対不可変の圧力と見え、こういう自然そのもののような時局を既成の観念でわり切ろうとするなどとは思ひあがった冒瀆だとも思われたようである。こうして方向意識は失われ、ただ銃をとり、抵抗すること、それだけが唯一の倫理となったのである。「銃をとらねばならぬ時が来たら、喜んで国の為死ぬであらう。僕にはこれ以上の覚悟が考へられないし、又必要だとも思はない。」(戦争について、十四年) こういう個人としてはすぐれた覚悟が、方向意識の喪失のため滑稽な悲劇に墮したのは、かれ一人だけではなかった。思想の勝利をついに一度もかちとったことなく、反対に現実とのどうしようもないギャップを見せられつつけて来て、ついに思想不信から、知性放棄となり、たとえ当時流行の「歴史的現実」(田辺元) というようなそれ自身としてはおそらく非のないことばにすがって、みじめに現実に屈服していった例は右にも左にもはなはだ多いのである。

小林の「観法」(私の人生観) が古典や美術に見事な力を發揮したことは事実で、かれの作家論は今日といえども古くなっていないが、その「観法」は歴史的現実に対して無力であった。これは「社会化された自己がない」(私小説論) というかれ自身の歎きにつながるわけであるが、さらにはかれの实在論に終に「社会」が登場してこないという事実も、市民社会を持ちえなかった日本の不具近代の複雑な、とらえがたい重層性に起因すると考えていいであろうか。左翼のいう「民衆」が観念的嘘だとは、かれがくりかえし主張したところであるが、「抗日宣伝に対して日本の政治の宣伝下手など攻撃してゐる一部のインテリゲンチヤより、民衆の黙々たる鼻の方が、宣伝といふものの性格について、もつと深く知つてゐると僕

は思つてゐる。」(宣伝について) というかれの民衆もまことに曖昧きわまるものである。

だが戦争の進行と共にやがて小林はこういう浅薄な発言はしなくなる。言論事情もあつたのであろうが、かれは現実のつらさから目をそむけて日本の過去に安住の場所をさがした。西行や兼好や実朝が掘り出される。第三の旋回点をここに措定した所以である。

「実朝の横死は、歴史といふ巨人の見事な創作になつたどうにもならぬ悲劇である。」(実朝) と書きつけたとき、かれはどうにもならぬ悲劇の進行を、畏怖の情をもつて横目で見ていたような気がする。「青年にさへなりたがらぬ様な、完全に自足した純粋な少年の心」——ランボオ以来の変らぬテーマだが、そういう純粋な内面的充実が汚濁に満ちた客観世界の中で悲劇になる状況が宿命的な眼でながめられる。この宿命観はもはやかれにとつて抜きがたく根強い固定観念になつたやうで、歴史という巨人を改変しようと考へるいわゆる進歩主義者は、現実に耐える力のない弱者であり、弱者の必然として空想家だという思想が戦後もくりかえし強調される。

「私は馬鹿だから反省しない、などといふ反語は少しも使ひ度くない。併し、私達が経験した大悲劇は、日本国民の非近代性に関する雄弁な反省などで片付けられるものではない、といふ考へを愛へる事が出来ない。事件は過ぎ去つたが、事件の遺した傷は、雄弁によつて治癒する様なものではない。傷が疼くのを知つてゐるのは当人だけだ。併し政治の扱ふ対象は事件であつて、当人の心の傷ではない。政治思想といふ集団思想は、決してめいめいの当人を思ひ起させるものではない。」と戦後六年経つて書きつける。政治ならびに政治思想への不信、清算に走つた知識人や文化の指導者面への疑惑、そして「たゞ文明が遅れてゐたといふ目出度い事であつたなら、

あんな悲劇が起つた筈はない」という考えが自分を「苦しみ、乱れ」させていると同じところで告白する。単純に反動などとは云えない。「無常といふ事」から「モオツアルト」「ゴッホ」にかけて、志向は一貫して変っていないのである。

## 五

意に満たぬ走り書きのまま、なお残された多くの問題にふれるゆとりを失ってしまったが、ここで私が論証しようと思ったのは、つまり次のような事からである。まず第一に小林の思想を規定し、方向づけたのは、饒舌と議論と解釈ばかり横行して、不動の実体感を喪失した現代社会、特にわが国におけるそれのおよそいかなる根をも持たない猥雑さに対する嫌悪と反撥であった。この感受性はたしかに我国インテリ社会の核心をすくわれて擲んでいたばかりでなく、それが小林自身のきびしい自己放棄への努力につながっていたがためにかれのことばは説得力を持ったのである。こうしてより確かなものを求めて、終に一切の雄弁と推理、心理やら弁証やらを近代的虚飾としてしりぞけ、「見ることは考へることだ」「愛することは知ることだ」という鍛錬主義的な直観法をもって、人間裸形の真実、絶対個体の概念発見へとおもむく。その一応の足がかりが「ドストエフスキの生活」であり、そしてここで反近代的姿勢を決定し、おそらくこの労作からアラン流の「職人の精神」という自覚を身につけるにいたるのだが、私の特に指摘したいのは、そういう新しい精神と方法の適用が、文献でもない、インテリ社会でもない、この複雑な現実社会そのものの透視には何らの力を持たなかつたということである。現実には圧倒的な力をもってこの直観主義者におそいかかる。職人の自覚を尊重するかれは、この現実における

骨格を合わせようとして、いそいで歯車をまわすが、終にどうにも合わせきれなくなって、自分のホーム・グラウンドに退く。この過程における無力の自覚、圧倒的に強力な現実の動きに対する畏怖感が、やがて肯定的に合理化される方向において、かれの思想に影響し、今日における小林の宿命観、不可知論、反時代的反社会的人間論、やや逃避的な造型美術への接近などの感覚的地盤をなしているのではないかと思われる。

こういう思想の色あいについては、その人の資質ということが重要な決定要素をなすのであって、一般的にだけ論ずべきものではないが、(この点、たとえば、小林を詩人だという通説などには異論があるのだが、こういう問題はここではふれない。)「職人の精神」ということ一つを取りあげても、それと禪的観法とは「私の人生観」のように必ずしも一本調子に結びつくものではないと思われるし、またこのような手工業精神が一切の科学思想を有害無益と断ずるようになったりすれば、やはり偏奇のそしりをまぬがれまい。もちろん、それが、理論が理論を生んで逆に人間をしる近代思想の化物に対する反撥であることはよくわかるし、その意味で痛烈でさえあるが、だからといって一足とびに宮本武蔵を対置することで救われようとも思われぬ。分析の悲哀が近代の一つのなやみであることにちがいないが、そこで見えるものだけを「見」た精神が、やはり現実を見そこなつたとすると、問題は小林のいうほど簡単ではなさそうである。小林がつまりつまずいたのはわが国の不毛の観念にあって、観念そのものではなかつたと思われるし、またかれが人間の絶対的側面、美や死を中核としてすべてを追求するのはいいとして、歴史とか社会とかに関する相対論を一切虚妄として排除しなければ立つ瀬がないかのような一途なあせりかたを示しているのを見る

と、かれが、その超脱的姿勢とは反対に、きわめて相対的な、不幸な時代の子であることを実感させられるのである。その相対的な反撥の強さは現実に対するパススペクティヴと健康な均衡感覚とを失わせるほどでもある。たとえば、現代フランスの実存主義など、政治的季節における個人の確認という一つの均衡感覚に裏づけられ、だからこそ、個人の深淵をさぐると同時に、それだけきびしく実践への出口が求められているのであるが、それがこの日本の批評家に出てきていない。かれの純粹芸術や、絶対性への憧憬はほとんど文学をふりとばしてしまわんばかりであるが、元來雑多なものの止揚体である人間や文学はそのために多く失われる危険がある。「きけわたつみのこえ」を読んで、「私は、学生の手記に現れた不安や懷疑の底に、彼等が見たに違ひないものを見る。それを彼等は仕方なく死といふ言葉で表現する。仕方なくだ。だが、それは人間の死ですらないことを彼等は感じてゐることを私も感じる。それは化物だ。」とかれは感じるが、ここまですぐ突込んでしまう前に、まだ相対的な思考を必要とすることがたくさんありそうだし、それとこれと相容れぬというものではないと思われる。

だが小林はもう自分は政治を信用しない、現代を信用しない、とぼつりぼつり語るだけである。かつてのように「現実につけ。」とはもう言わない。そしてゴッホやドストエフスキに埋まる。苦渋の念が心を蔽っているのだろうか。どうにもならぬ宿命の主調低音に耳をすましていくかのようだ。その姿は日本の遁世文人列伝中の人物にさも似ている。

(一九五二年八月)

注

若干の改訂箇所もあるようだが、引用文は一応創元社の全集本によった。

(『昭和文学作家研究』昭和三〇年五月、柳原書店発行)